

キリスト教東方正教会 修道院巡礼雑記

清 水 澄

藤堂恭俊先生（仏教学科を導師に仰いで、高橋弘次（同上）、加藤信孝（社会学科）、竹内明（教育学科）、藤本浄彦（一般教育）の諸先生及び稿者（一般教育）の一行六名が、キリスト教東方正教会へ通常、ギリシャ正教或はロシア正教と呼ばれている一の修道院を訪ね歩いた昨54年秋のヨーロッパ旅行の「こぼれ話」を綴って『正教会修道院巡礼雑記』と題する。

新ヴァラモ修道院（フィンランド）

～一筋縄ではいかぬ人々～

笈を背負う代りに、ローラー付きのトランクを引きずった一行が、大阪国際空港で水谷幸正学長（当研究グループの団長でもあられる）の激励の御言葉に送られて、最初に訪ねた国はフィンランドである。

新ヴァラモ修道院は、フィンランド東部の地方都市クオピオから、南東へ湖と白樺と鈴蘭の道をバスで四時間近く、「カレワラ」の歌声の聞えてきそうな辺境にある。「新」J.D.と呼ばれる所以は、元来、ラドガ湖上の孤島に在って、カレリアの代表的な修道院（盛時には四百人の修道僧が居住し、広くロシア中から巡礼者を集めたという）であったのが、

一九四〇年にソ連軍に占領されて当地に逃れて再建したことによる。今日は、レニングラードの正教会アカデミー出身の若い院長の下で九名の修道僧よりなる小さな僧院である。52年秋に初めて此処を訪ねた時に比して、宿泊施設等も整い、訪問者も増えている。ケニア人の青年が、ここで学びながら案内役を務めているのには驚いた。ヘルシンキから来たというプロテスタント（フィンランドでは九割近くがルター派である）の夫婦とカトリコン（僧院内の教会堂）の中で一緒になった。お堂の中では神妙にしていたが、サウナの建売業者でなかなかの商人であった。わざわざ自動車まで商品のカタログを取りに行つて、熱心に売り込んでくる。カタログは資料の一つとして持ち帰ることにしたが、何だか外国に居る気がしなかった。

ケンブリッジ大学で哲学を修めたクリストフォロス師は、度のきつい眼鏡こそ同じであるが、法名もアンブロシウスと改めて、すっかり貫録をつけている。週に一度、クオピオにある正教会セミナーで哲学や思想史を教えている。バスの中で思索を楽しみながら通うのかと問うと、乗用車で素ッ飛ばすのだそう。いつか暇な時間があれば、と云いだし

たので、杖をひいて通うのかと感心して聞いていると、真面目な顔をして、ボートを漕いでいきたいと云った。修道院の横の湖からクオピオまで水路が通じているのである。

クオピオには全フィンランド・カレリアの正教会センターがある。府主教パウル老師は当代の正教会中の高僧の一人と目されている



向って右から三人目がパウル府主教

立派な方である。物静かなところは岸信宏御門主に似ていると藤堂先生が気に入られ、太い話がはずんだ。時を改めて軽食に招待して下さったが、四方山の話の後で、宣教に熱心なカレリア教会の伝統が彼の口から出た。つまり、近い将来、日本でも宣教したいが、あなた達は反対しないかと問う。歓迎しますと答えた我々の顔に当惑の色が浮んでいたのか、老師は、今の問いは冗談だと云って、ニコリとされた。

センターの中に、正教会博物館とセミナーとがある。博物館はカレリア教会の往時をしのばせる素晴らしいものである。セミナーの礼拝堂のイコンの中には、フィンランド在住の日本人の某氏の画いたものもある。案内のブルモーン教授は、笑いながら、彼の書く聖者には東洋人の面影があると云う。成程、イエス様も、どこか日本人的な顔付である。日本人が画く以上、当然といえば当然であるが、

彼も亦、一筋縄ではいかぬ人物とみた。

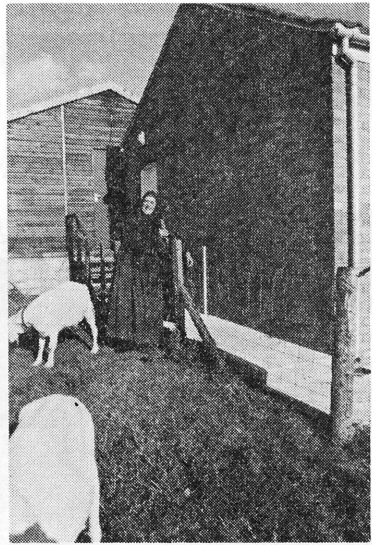
聖母被昇天修道院（イギリス）

「神の誉れ」は思慮の外

マザー・マリヤ（1913-1977）が苦勞の末、一九七四年に二人の弟子と共に小さな尼僧院を樹てたのは、初期イギリス教会史上、重要な教会会議の行なわれた（六六四年）ウィットビーに近い丘陵であった。

汽車を乗り継いで、やっと辿り着いたウィットビー駅前のタクシーが出払っていたので、電話して迎えを待つこと小一時間。大型の乗用車が近づく度に、出迎えかと走り寄ったが悉く違った。日本では滅多に見られぬ汚い古ワゴンが現れて、まさかあれではあるまいと云い合っていると、これが迎えの車だと日焼した頑丈な男が運転台から降りてきた。ガタガタ走っている間に、彼がこの町の中学校の校長先生だと解って一同すっかり恐縮した。

丘陵の畠中の尼僧院の門前で、セクラニが大柄な全身に喜びを表して一行を迎えて下さった。楚々とした京都辺りの尼様を想像していた訳ではないが、マザー・グースの歌の



セクラニと山羊

度キーツ研究でオックスフォード大学に留学しておられて、我々の在英中の世話をしてくださった関西学院大学の津田迪雄教授に進呈した。山羊をお供に泥だらけになって働いているセクラニにこの著があるとは、手にするまでは想像も出来なかった。

北海を見遥かす畠の隅に、マザー・マリアの墓詣りをする。セクラニは、もうすぐ自分も此の隣りに横わることになるうと

本から抜け出たようなセクラニの大きな手を握ると思いの外に温かだった。一緒に出迎えて呉れた山羊が鳴きながら一行の胸元を嗅ぎまわっていたが、稿者に胡散臭さを嗅ぎつけたのか、いきなりネクタイを半分ほど銜えこみモグモグとやり出したので吃驚した。

二人の老尼の苦勞話を聞いた。イギリス人のキャサリン尼は無口だが音楽の才能があるらしい。底抜けにお人好しのロシア人氣質そのままの顔をしたセクラニは、バーゼル大学で哲学博士の学位をとった師僧マリアの後を継ぐに十分な知性を備えていて、すでに教冊の書物を著している。彼女の『キーツ論』を、丁

云う。仲良く相並んで復活の日を待つのですねと云わずもがなのことを云うと、その日までは長い長い淋しい旅をしなければならぬいと彼女は応えた。晩秋の風が蕭々と灌木を渡り、その時、言葉の意味を問いかねたが、帰国後、問い合せの手紙を出した。返事には、あれは象徴的な意味で云ったので、お前が想っているごとき輪廻観は毫も持っていないと書いてあった。今生で、もう一度会いたい老尼である。

祝日には聖母被昇天修道院の司祭を勤めるシメオン師を、ニューキャッスル大学哲学部の宗教史研究室に訪ねた。仏教学の大家が来

たというので学部長も挨拶に出てこられた。シメオン教授との対話に、若い女性が同席していて、時には助言めいたことをする。彼は旧約学者だが、歴とした正教の聖職者であり、どうも合点がゆきかねた。正教会神学専攻の女子学生かと思ったが、後で彼女に聞くとオックスフォードの街の人で、今、正教会で高名なT・ウェア教授の教会に属しているとのことであった。うっとりするほどの美人でもなかったのだが、六人とも皆、彼女に名前を聞くのを忘れてしまった。

ニードーアルタイヒ修道院(西ドイツ)

老僧の口は黄金キの口

西ドイツの東方正教会研究の一つの中心地であるヴュルツブルクのアウグスチヌス研究所と、エキュメニカル運動で有名なニードーアルタイヒ修道院とは、藤本先生が52年秋から関係をつけてこられたところである。

メイン川上流の静かな美しいヴュルツブルクでは、小さなホテルを予約してあった。丁度お祭りの時期であったので、日本から夫婦づれで見物にでも来るものと思っていたのか、ダブル・ベットの部屋が用意されていた。

他のホテルも満員で、やむなく二人づつベツトを同じくする破目になった。翌朝、食事の席に着いた一行六名は、皆、何だか浮かぬ顔をしていた。

ニードアルタイヒ修道院は、ミュンヘンを貫流するイーザル川を呑み込んだばかりのドーナウ河の辺りにある。バイエルン地方随一のベネディクト派修道院で、その創立はカルル大帝以前に遡る。東方正教会との関係回復を呼びかけた一九二四年の教皇ピウス十一

ビュルツブルグのホテルの前で



世の教書に依えて、ビザンツ典礼をも兼ね修し、院内に正教会の礼拝堂を設け（一九五五年）、一九六二年にはエュメニカル研究所を設立している。

正教会修道僧の長老、クリソストモス師は亡命ロシア人で、修道院全体の副院長格である。藤本先生との再会を喜び大いにサーヴィスして下さった。日本のことをよく知っていて、神武、綏靖、安寧と初期天皇の名前を暗誦して我々を吃驚させる。しかし我々が他の修道僧との間で英語の会話を交したり、神学問題を論じたりすると、大きな体をグツタリさせて、悲しそうな顔をして下を向いたりしている。両派の修道僧が一緒に食事する食堂では修道院長と並んだ席から我々の方に胸をはってみせる。80才の亡命ロシア人はいろいろなことを経験してきたに相違ない。ベネディクト派の大修道院の中で暮していくには、さまざまなことがあるに相違ない。彼は「黄金の口」で、ひたすら「ゴスポディ・ホミルイ」（主よ慰み給え）を唱えながら、終りの時まで生き抜いていくのであろう。

『巡礼者の道』の独訳者ユングクラオセン師は、Fr・ハイラーとも親交のあった学者である。約一ケ年間、鎌倉で坐禅してきたとい

うだけあって、どこか東洋的な落着きがある。常に頭を垂れている風で、大勢に立ち混っていても、すぐ見分けがついた。正教会の礼拝室でミサを主宰する彼の瘦身には司祭としての有難さよりは哲人的な威厳があった。

修道院の門前に穴倉のようなレストランがある。夕べの勤行が終って僧院を脱け出していくと、修道院附属学校の新学期が始まる時期で、久し振りに顔を合せた上級生連中が大勢でビールを飲んで騒いでいる。僧院生活をしている我々一行はアルコール類を固く自らに禁じていたので、やむをえず美味しい生のワインの盃を重ねた。普通の日には、修道僧も昼食にはワインを飲む。その時には遠慮がちにお相伴していたので、夕方、我々だけでもう一度ということになる。

アトス山修道院（ギリシャ）

尖端に二〇三メートルのアトス山が屹立する長さ約四八キロメートル、巾約四〜六キロメートルのアトスの半島（ギリシャ北部、ハルキディキの三つの半島のうち東端の半島）は、「パナギアの庭」、「天と地の間」と呼ばれて、数多くの修道施設をもつ聖地であ

る。十世紀以来、修道院の一大センターとして全東方正教世界で大きな位置を占めつつけてきた。今日、ギリシヤ国より半ば独立した特異な宗教共同体をなしている。

テッサロニキで入山手続きをして、ホテルに荷物を預けて、登山スタイルでアトス山修道院群を訪ね歩いた。平素はダンディーな藤堂先生も旧陸軍軍人の勇姿を取り戻されたが、先生のファイトには只々、頭が下った。

旅行中の諸難関を貫録と決断とで打開して下さった高橋先生も、ここでは、我が生涯の最高の苦しみと、いささか弱音を吐かれた。

変な人々

カリエはアトス半島のほぼ中央の東傾面に開けたいわば首都である。世俗世界との出入口である西海岸のダフニ港からバス（俗人の私営バス）にゆられて一時間余、カリエで降りると周囲は誠にアツケラカンとした山腹の広場で、僧俗の相客達は足早やにどこかに消えてしまふ。カラン・カランと鈴を鳴して驢馬が紅葉した茂みの向こうの道を歩いていたりする。しかし首都だけあって、聖庁、政府出張所、警察、学校、日用雑貨・土産物店、



アトスへの道 路傍には「辻地藏」が立っている

病院（院長は獣医さん？）等がポツリ・ポツリと並んでいる。十九世紀末のスケッチを見ると、大勢の僧俗で賑っており、今でも真夏にはかなりの賑いと聞が、我々の訪問時がいとも秋も聞けた頃であるので、散閑とした印象だけが強く残っている。

アトス山宗教共同体の聖庁の近くに、二人の老人で開いている汚いレストランがある。

小さなテーブルを四つばかり並べて、メニューは豆スープだけである。運が良ければ野菜の煮物のある時もある。運び役の小柄な老人が何に興奮したのか、奇声を発して踊りだした。長靴の足で跳び上り、靴の裏を手で叩く甚だ勇壮な踊りである。漸やくにして運んで呉れるスープ皿の中に、彼の伸びた黒い爪の親指が浸っている。「これがアトスだ、さあ食おう」と囁る外はない。

古い巡礼道を辿っていると、あまり遠くないところで銃声がする。獲物になりうる鳥も獣もいそうもないのだが、いや第一に聖域で銃砲打ちとはけしからんと話合っていると、向うから鉄砲を担いで背の高い男がやって来た。役所関係の人間かも知れぬが、服装からみるとケリア居住の修道士かも知れぬ。何者か判然としない。鋭い目付をしてスタスタと行きすぎた。

いろいろな巡礼者に出会う。母を亡くした青年が数珠を手を歩いている。兵役前の休暇を巡礼に当てている青年もいる。亡き妻を偲んでの巡礼かと思っていた老人が、今度出会うと栗の実をつめた大きな袋を担いでいたりする。冷たい雨の中を外套をかぶって、独り、ゴソゴソと歩いていくかなりの年令の老人が

いたが、後日、彼には会わなかった。或る日、村の司祭さんに引率せられてブルガリアに近い田舎からやってきた30人ばかりの巡礼団と泊り合せた。大きな携帯ラジオを持ってきている者、引き抜いた苗木を大事そうにしている者、我々と話し込んでクリスマスには、カードの交換をしようと申し出る者等、さまざまである。夜中に我々の部屋へ入り込んできた奴がいた。枕元に立ってブツブツ唱えごとをする。仲間が来て無理やり連れていって呉れたが、全く得体の知れぬのが混っている。

アテネのビザンツ研究所の某氏は、ソルボンスにも留学した歴史学者である。同じ船でアトスに入ったが、数日後イヴァロン修道院で再会した。親切な人でいろいろ教えて呉れたが、ビザンツについての彼の質問に正しく答えると、大げさに「ブラボー」と云うのは閉口した。我々が健康状態からして、一度テッサロニキに帰るといふのを聞くと、あっさりとして予定を変えて一緒に帰ると云い出した。皮製の大きなトランクを頭に載せてカリエへの道を手前立に立って歩いていく。NHKの鈴木アナに似ているが、もう少し禿げている。汗で頭上のトランクが滑るのか、しきりに頭を拭う。加藤先生の水筒は殆んど彼一人

で飲んでしまった。テッサロニキへのパスの中で、彼は隣席の修道僧相手に喋りまくり、修道僧は悪酔して吐いていた。

「黒い天使達」

困った話

早稲田大学文学部の高橋栄一教授には、アトスに関して御教示をいただいていたが、修道僧から発心してアトスの修道僧となるよう執拗に迫まられて大いに弱ったという話を承ったことがある。真摯なお人柄のビザンツ美術の大家にアトスの僧も惚れ込んで勧めたのであろう。さもありなんと、その時、秘かに思ったものである。

ところが、アトス研究を始めたばかりの、しかも道心堅固な仏教僧侶である我々が同じような目に遭うに到ったので本当に困った。因みにギリシャ正教を国教とする此の国では他宗教・他宗派が正教徒に布教し改宗させることは禁じられている。勿論、逆は可である。ギリシャ正教の牙城たるアトス山において、状況は我々にとって著しく不利である。

ピロテウ修道院で、夕食の後に、一人の年輩の僧がにこやかに近づいて来て、ゲスト・

ハウスで話をしたいと云う。当院はアトス山でも屈指の規律の厳しいところであるから、聞きとり調査のチャンスとばかり大いに喜んだ。少し話した後、お前達は神の存在を信ずるか問うてきた。広い意味での神を念頭においていたので、軽卒にも信じると答えたのが失敗であった。彼にとっては、当然のことながら、キリスト教の神しか頭になく訳であるから、此処で修道僧になってすべてを神に捧げる生活を送れ、さあどうだ、どうだと一方的に攻めまくって来る。教養よりも頑固な信心が彼等の伝統的な面目であるので、すっかり手を焼いている裡に夜も更け、灯を入れた僧が仲に入って呉れて漸やく助かった。明日、またこの続きをやるうと云って、彼は説得を諦めた様子をみせない。翌日、彼の姿を見ると逃げ廻ったが、我ながら、いささか、なさない思いがした。

パンテレイモン（ロシコンとも云う）修道院では、通訳を兼ねて我々に協力下さったアテネ大学神学部留學生の長屋房夫師が困る番であった。帝政ロシアの頃には、当院で三千人、二つのスケートと八十二のケリアで七千人、計一万人のロシア人修道僧がアトスに居住した事があった。今日、僅かに二十六名が

居るに過ぎない。宏大な僧院も荒れるにまかせ、ケリアも田畠、山林も放置されている。そこで、副院長ミカエル師は長屋師に口説いた。好きな所を差し上げるから日本人修道僧の手で再建して欲しいと。レニングラードで六年間も学んだ長屋師を見込んで彼は熱心に説得しにかかった。長屋師は困惑の態であったが、少しは心を動かしている様子もみえた。これは日ソ間の新たな紛争の種になりますよと云おうと思ったが、長屋師が深刻に考えて一層困るといけないので黙っていた。

生臭い話

最近のアトス山の活気の源の一つは大学卒の若い修道僧の増加にあるとみてよい。シモノペトラス修道院もかかる傾向を如実に示している。我々の現地協力者の一人であるテッサロニキ大学神学部のジアカス教授の教え子が、当院に二人もいる。恩師の友人達というので鄭重にして呉れたが、正教修道僧の特徴である長く伸ばした髭の顔で、ヘヘッと愛想笑まされてみせるのには気持が悪かった。滞在二日目の夕方、兼ねて当院にロンドン大学出身のイギリス人修道僧パウロ師が居るのを聞き込んでおり、夕食の際、彼らしい人物を

見付けていたので、ジアカス教授の教え子の修道僧達に彼に会いたい旨を伝えた。彼らの表情は冷めたくなり言下に断われた。彼は不在だと云う。先程、食堂で見かけたと反論すると、食後直ちに隣りの修道院へ出かけてしまったと応える。彼等二人だけでなく、他の若い修道僧達も、にわかに我々に対する態度をかえ出した。到頭、パウロ師に会うことが出来なかった。我々が彼等の好意にもかかわらずパウロ師に会いたいと云ったのがいけなかったのか、パウロ師自身が何か問題を持っている修道僧であるのか、今に到るも釈然としない。

アトス山のルネッサンスの具体的な相の一つは、アトス山修道院の二大形態である共同修道制と個別的修道制のうち、後者から前者への志向が現実的な趨勢となってきたところに認められる。前者はアトス山に本来的な修道制であり、修道院長の指導の下に完全な共同生活を送る（財産も共有である）。後者は後に興った制度であり、数人の長老によって修道院が運営され、修道僧は各自の工夫・努力で修道生活を送る（財産の私有を認める）。近年、すでに二つの修道院が転向している。ドヒアリウ修道院での聞きとり相手は33才で、

アトス山で今、流行の金縁の眼鏡をかけてインテリ風を吹かす輩とは異って、なかなかの面構えである。個別的修道制の当院を共同修道制に変えるべく、六名の同志と共にクツルムシウ修道院から乗り込んで来たらしい。ここ五年の間にはアトス山修道院はすべて共同修道制に転向するだろうと鼻息も荒々しい。どのような手続きで当院へ移ったのかと聞くと、当院の長老達の招聘に応えたものだと言う。しかし、すぐ後で長老格に会うと、顔を擧めて個別的修道制が容易に共同修道制に変るはずはないと断言した。一見して、眠っているように静かな修道院の内部で、深刻な改革劇が進行しているのである。

すでに幕が降りた後で、思いがけず主役の一人に舞台裏で出会ったこともあった。アトス山の活気の他の一つの源は、ギリシャにおける修道院のアトス集中現象にある。つまり、種々の理由から従来居住していた修道院を捨てて大挙してアトスへ移住して来る。テッサリ地方のメテオラ諸修道院からの移住が多いが、この場合はいわば本家帰りである。クセノポントス修道院はメテオラからの移住僧が中心となって手入れの行き届いた感じの良い修道院である。接客係の僧も移住組の一

人で、議論は出来ないが温厚な青年僧である。ところが隣りのドヒアリウ修道院でカトリコンの案内係をしている老僧が、クセノポントスで20年間、院長を勤めた人物であった。驚いて理由を聞くと、クセノポントスの連中に聞けと皮肉っぽく笑うだけで、それ以上何も云わない。クセノポントス修道院へ戻って例の青年僧に聞くと、昨年、何かが起ったと答えるだけで、更に聞くと、こんなことを聞き出してどうするかと聞きなれるから取りつく島もない。つまり、メテオーラからの移住僧達が、従来の院長を追放したのである。しかし追放された院長が個別的修道制の修道院に身を寄せているのである。特別の事情もあるに相違ないが、騒動の大概は察することが出来る。

怪しげな話

先年、シモノペトラス修道院にインドで修行してきたと称する修道僧が来て、手を触れずに机上の物を動かすといった類の奇蹟の数字を演じたそう。修道院長が差し出した十字架を見て、流石の彼の魔法も威力を失ったが、院長はこの事件の仔細を記録に留めているそうである。このような話が、まことしや

かに語られるのを聞いた。アトス山には、このような事件が起っても不思議でない雰囲気がある。しかし化物の正体は、恐らく次の二点であろう。一つは、東方の宗教に対する伝統的な警戒心。もう一つは、高学歴修道僧の増加に対するアトス的エーロスの反作用。

イヴィロン修道院の近くのケリアに住むパイシオス師は、さまざまな小動物と共に住み、彼等を意のままに従わせることが出来るとして知られている。彼に面会することは叶わなかったが、彼の弟子筋に当るアトス山正教会アカデミーの副校長のヨセフ師に聞いたところでは、常人にはない能力の持主らしい。アトス山の生え抜きの修道隠士ではなく、シナイ山で修道した後移住してきた人で、年令は52〜55才。シナイ山時代に、彼の隠者小舎で羊がよく云うことを聞き分けるのを実際に見たとヨセフ師は云う。また、ヨセフ師がレニングラードに留学中のことを、彼はアトス山に居ながらにしてよく知っていたと、感に耐えぬ顔付で語って呉れた。今日、アトス研究の第一人者であるテッサロニキ大学神学部の方・マンツァリイデイス教授も、彼のところで蛇や蠍が意のままに従うのを見て驚いたという。小動物を飼ひ馴らして人を驚かすのは

邪道ではないかという問いに対して、ジアカス教授は、神に近い境地まで深まった宗教者にとって他の動物と親しくなるのは当然の現象で、仏教者の場合でも同様ではないのかと応えた。当代アトス随一の高僧、ディオニウ修道院の元院長で93才でなお矍鑠としているガブリエル老師は、今までに出会った最も尊敬に価する修道僧は、当院に居た故イサク師で、無教育な人であったが謙虚で非常に立派な修道僧であったと語った。どのように立派であったか聞き損ねたが、羊や蛇で人を驚かすようなことはなかったらしい。少なくとも、老師は、そういうことに感心した訳でないことは確かである。

「こぼれ落ちない話」は、すでに、京都新聞(藤堂)、佛大社研「研究所報」(加藤)、中外日報(全頁)、東方界(藤本)等に発表され、今後も他の先生方が御執筆下さると思う。水谷・藤堂両先生を始めとし、一行の諸先生方に心より感謝しつつ摺筆する。(なお当調査旅行は54年度「文部省科学研究費」の補助による)

(しみずとおる 文学部教授)